

●書評 R・R・リューサー著／小檜山ルイ訳
『性差別と神の語りかけ フェミニスト神学の試み』

四六判、三七四＋七頁、四四二九丸
九六年二月、新教出版社



森本あんり

大学でフェミニズムを講ずる時、一冊だけ教科書に指定するとならば何を挙げべきか。これまでならば評者はドノヴァンの『フェミニストの理論』(勁草書房刊)を挙げた。同書に「実存主義的フェミニスト」と括られているリューサーの『性差別と神の語りかけ』が日本語で手に入ればどんなによいだろうか、と思いつつである。それが、このたび小檜山ルイ氏により邦訳された。たいへんありがたいことである。

本書は、ドノヴァンの著作と同じように、著者ローズマリー・ラドフォード・リューサーが十年にわたって続けたフェミニスト神学の講義から生まれた、実践

的かつ体系的な教科書である。目次を見ると明らかなように、リューサーはフェミニズム神学の諸論点をプロレゴメナ、神論、創造論、人間論、悪の問題、キリスト論、教会論、救済論、それに終末論といった伝統的な組織神学のロキに沿って配列している。一九八三年の第一版出版以来、本書はアメリカでフェミニスト神学を論ずる際の不可欠のレファレンスとなつていくが、その後も特定論題を扱った書こそあれ、本書のように組織神学の全般をフェミニズムの視点から論じた包括的な著作は出ていない。そのため、本書は一九九三年に新たな著者序言を付して再版された。今回の

邦訳はその第二版のものである。

教科書としての使用を意図したものであるだけに、各項目がバランスよく論じられているが、その中でも特に秀逸なのは、第四章「人間論」に論じられた家長主義と平等主義の対比、終末論的、自由主義的、ロマン主義的フェミニズムという類型論、それに第八章「新しい世界」における自由主義的、社会主義的、急進的フェミニズムの分析と批判である。これらは、読者(特に教師と学生)が錯綜する論点を整理して自己の足場を確かめるのにならず役立つはずである。教科書といつても、他人の意見を標題ごとに羅列しただけの安易な編集ではなく、すべて著者自身が読み砕いた上でみずから発言としたものである。その類型論に明らかかなように、リューサーはさまざまに適切な批判を加えるという、冷静で客観的な態度を保持している。彼女は、悪の原因をすべて男性に帰して女性を無垢の犠牲者とするごときナイーヴな見方には与さない(四四頁)。女性がこれまで抑圧者となるのが少なかつたとしても、それは歴史的にその「機会」を持

たなかつた(二四二頁)までのこと、女性も男性と同様に人間としての弱さやエゴイズムをもっていることや(三〇三頁)、イエスが「被抑圧者の復讐を正当化する誘惑」を拒否したこと(五七頁)などに目を注ぐあたり、聖書的な人間理解にもづく現実主義ということができらるだろう。

各論に入る前の第一章は、キリスト教神学の一領野としてフェミニスト神学を構築するに際しての著者の基本的な方法論と態度決定を表明しており、本書の中でもっとも重要な部分である。フェミニスト神学の何たるかを本書によって掴みたいと思われる方は、まずこの第一章を注意して読まれたい。この章は、伝統的な神学との折衝が多く必要とされるところであり、それゆえにフェミニスト神学の足腰の弱さが目立つところでもある。たとえばその冒頭には、「女性の経験」を神学の「内容」と「真理基準」とすることにしているが、神学という学の中に人間の経験を位置づけるには、いまま少し慎重な組織神学的検討が必要であろう。けれども、それはそれでよいのである。総

じてフェミニスト神学では、解決されるべき実践的課題が先に立てられており、神学的な反省は後からついていく。この順序は性急に批判されるべきではない。神学はすべてそのように実践的な課題追求を原動力として発達してきたのであって、あとはフェミニスト神学の今後に期待すればよいことである。他方、フェミニスト神学の方でも、たんに伝統的な神学をすべて男性中心主義として一蹴すればおのずと新しい神学への視界が開けると信じているわけではない。批判は、十全な理解の上に立てられてこそ有効な批判となるからである。

ただし、序章の「父なる神のケノース」という三幕劇はない方がよかつたであろう。著者の意図が如何にもあれ、ここではほんらい討議の対象とされるべき重要な諸テーマが劇仕立てで曖昧なままに提出されており、本文でそれらが再び論じられることもない。そのため、結果的には「ほのめかし」や「当てこすり」の連続で、他者の論評や批判を容れない独白となつてしまつていく。学術書としてはまったく無責任な表現方法である。もし著者がこれをフェミニスト神学

の原風景的な「物語」であると主張するならば、著者はフェミニスト神学を不当に安っぽい三文小説にしてしまう危険を冒していると言わなければならない。

小檜山氏は訳者としてこれらすべてを理解した上で訳業にあたつておられる。巻末「あとがき」には、控え目ながら「私見」としてリューサーに対する批判がいくつか述べられているが、いずれも的確で、読者をして本書を著者よりも深く理解せしめるための導きの糸となっている。そこには、フェミニズム神学の射程と限界についての深い理解と洞察が湛えられている。何よりも訳者をこの訳業へと促したのは、キリスト教が一面で女性の差別と抑圧の原因となりながら、同時にそれと闘う女性解放の強い推進力をも提供するという、逆説的な根本洞察である。訳者は自著「アメリカ婦人宣教師」(東大出版会)において、「向上」と「献身」という相反する動機がともにキリスト教信仰に根ざしていることを論じたが、この優れた研究には評者も多くを学ばせて頂いた。キリスト教信仰に内在する逆説と両義性を見つめる訳者のこの視点は、「聖書の信仰の中に、聖書の

文書そのものを批判する規範が認められる」というリユースの根本洞察(四八頁)とも深く通脈している。リユースのフェミニズムは、聖書の伝統そのものが聖書の批判原理となるという理解において、固有の神学的営為である。この点において、訳者は著者に心からの共感を抱いており、評者もまたこの両者に心から共感を抱く。

訳者は、ご自分でも断っておられるように、神学思想やキリスト教史を専門とする研究者ではない。そのため、ときおり腑に落ちない訳語にお目にかかるのも致し方ないであろう。「予言者の原則」(四八、六一頁)、「左翼清教徒」(六四頁)、「自然神学」(二七頁)、「社会的福音主義」(一五三頁)、「ホラス・ブッシュネル」(一七九頁)などは再考を要する。「聖職祿再専有」(二七五頁)や「社会的聖職活動」(二七九頁)には苦勞のあとが見えるが、読書にはかえって何のことやらわからなくなってしまう。「ヘルプミート」(一三九、一三二頁)に至っては、平均的な日本人にはまったく意味不明であろう。

それから、題名の God-Talk を「神の

語りかけ」と訳したのは何か理由があったことであろうか。これは近年「Deep」の代用にされる言葉で、God は主格ではなく対格である。「神の語りかけ」ではなく、「神についての人間の語り」つまり「神学」である。あるいは出版社との話し合いでより柔らかな響きの言葉を選んだのかもしれないが、原著にそれを支持するような主張は見当らない。

フェミニズムの文献には、しばしば直視に耐えないような直截な術語や表現があらわれるが、訳業をおこなう者は及び腰にならず正面からこれに向き合わねばならない。「傷つけられた性器 Emended genitals」(三三七頁)は、中近東やイスラム圏のアフリカ諸国でおこなわれる「女性性器切除」のことである。「戸外及び家庭での強姦」(二八六頁)ではピクニックにでも行ったような印象だが、*in the streets or home* は場所のことではなく「見知らぬ他人による強姦」か「夫や父親など家族による強姦」かという意味であって、それぞれに重い内容をもっている。逆に、二九七、三二四頁の女性

「性器」は reproductive/sexual organs だから「生殖諸器官」で十分である。

なお最後に、近年の話題から一つ興味深いのは、一九九三年一月にミネアポリスで開催され大きな問題を引き起こしたいわゆる「リ・イメーシング会議」に本書がどのような影響を及ぼしているか、という問いである。会議の出席者たちは、本書に前提されている「女/神」と「女神」との違いや、前者が「分析上の記号」であって、「礼拝には適さない」(七七頁)という彼女の重要な指摘をどこまで理解していたであろうか。そしてリユース自身は、本書以降この会議に至るフェミニズムの足取りをどのように評価するであろうか。

本書の出版を機に、日本でも流行に左右されないフェミニズムの真摯な研究が一段と進められるであろう。キリスト教とフェミニズムとの密接不可分の関係を探るためにも、本書は最良の資料である。上梓を心から喜びたい。

(もりもと・あんり 国際基督教大学大学
牧師)